

UNITED CUBES GARDEN COURT SEIJO

東京都内でも有数の高級住宅地・成城に、新発想のタウンハウスが誕生した。戸建て住宅とも、集合住宅とも見える佇まいで、成城の閑静な住宅街に、14住戸のCUBEが周りの住戸と肩を並べるように建っている。

事業者は「従来には例を見ない集合住宅をつくりたい。建築家のクリエイティブな発想をトータルに活かしてコラボレーションしたい」とコンペに踏み切った。審査委員長は山本理顕氏、選ばれたのは、妹島和世建築設計事務所だった。14住戸を20の小さな棟で構成し、その位相を少しずつずらすことによって、さまざまな住戸の組み合わせを図った案である。“成城”というブランドの中に、どのように馴染み、そして新しい成城をどのように作り上げていくのか。

今号は、都市の中の集合住宅の新しいモデルを実現した「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」の設計・計画内容を探った。

特集3

デザインする街—6

ガーデンコート成城 UNITED CUBES



最高級住宅地に戸建て風タウンハウス

奥野弘美
HIROMI OKUNO

「特集3」 デザインする街 6



おくの・ひろみ—コスモ環境開発 代表取締役/1947年生まれ。宮崎県立宮崎高等学校工業学校電気科卒業。1966年、沖電気工業入社。1969年、代々木電気入社。1972年、大蔵屋入社。1983年、オークラヤ住宅へ移籍。1986年、コスモ環境開発設立、代表取締役就任。現在に至る。

GARDEN COURT SEJO UNITED CUBES

“住居専用地域における大きめの敷地延長型の土地（旗竿敷地）を有効に活用するにはどうしたら良いか”をいつも考えていたのですが、ある時、整形地の土地に地下を利用してタウンハウスを創っている他社の例を知りました。整形地は、ある程度まとまっていれば大手業者でも開発を行いますので、どうしても価格競争になり、わが社が土地を取得することは難しくなってきます。そこで大手が手掛けない敷地延長型の土地を物色していたところ、成城学園前駅から程良い距離の成城5丁目に土地情報を得、大手との競争なしに取得することができました。

容積不算入の地下室を活かして、規定以上に容積率を多くし、しかも成城の街にふさわしく、また今までの日本で創られたことのない分譲のタウンハウスを創るには、日本の建築家の方々に知恵を出していただくのが最も良い方法だと考えました。具体的には、コンペによって可能ではないかと思い、プロポーザルコンペを実施しました。

わが社の家創りは、“住宅にとって最も大切なことは、採光と通風と緑をそ

れなりに満たすこと”。それが、快適な住空間を創り、建物の寿命を長くする建物となることだ、と考えています。

そこでコンペのテーマを「光と風と緑」としました。場所が成城ということもあり、300を超える応募があり、103の作品が集まりました。ほとんどの作品が、今までのタウンハウスの領域を超えない長屋風の建物でしたが、妹島和世先生の作品だけが、常識を超えた全く発想の新しいタウンハウスであり、山本理顕審査委員長も感心しておられました。内容をよくよく理解していくと、確かに各戸別々に離れて建っていて、採光と通風と緑を十分に満足した計画でした。しかし、3層あるいは4層構造の住戸がかなり多く、実際の生活においては、階段を相当多く使うことになってしまうという大きな問題がありました。従って、この課題を解決しないことには商品化しても売れない。つまりお客さまに受け入れられないと考え、随分と悩みましたが、山本委員長から「その問題はこれから妹島さんとよく話し合ってじっくり考えれば解決できることです。とにかく、妹

島さんの設計は、分譲に際し大きな後押しになりますよ」という強い勧めで妹島案を選択しました。

成城に住宅を求めておられる人々に、リーズナブルな価格で提供し、「戸建て住宅はとて買えないけど、このタウンハウスなら戸建て住宅と遜色ない感じがするね」と言ってもらえるものにするには、いろいろな面でクリアしなければならない課題がありました。その解決策としては、4層構造の住戸をなくすこと、地下室をもっと多くし、ドライエリアを広く取り、トップライトを設けて地下室でもそれなりに明るい快適な空間を創り出すことでした。妹島和世建築設計事務所には模型をつくってもらいながら、何度もプランを描き直していただきました。地下室をできるだけ多く創る目的は、容積に不算入の部分によって、容積率80%を超えて延床面積を多くし、少しでも分譲坪単価を抑えようと考えてのことです。何しろ私自身、大きな地下室でトップライト、あるいはドライエリアがある空間での生活を経験していませんので、出来上がるまで地下室の明るさには不安がありましたが、完成して内見した時は、予想より明るく、外気は暑いのに大変涼しい快適な空間であることに安心しました。もともと地下水は夏は冷たく、冬は暖かく感じるものと理解していましたので、納得のいく居住空間となりました。

もう一つこだわりを持ったことが、敷地内のどこかで一年中花が咲いている庭を創ることでした。ガーデニング専門の有名な造園業者に相談しながら、木の種類、草花の種類を丹念に調べて実現することができました。*



上—2階から路地を見る
下—敷地・配置図



「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」周辺



新たな住環境を目指して

山本理顕
RIKEN YAMAMOTO

今、住宅に求められるもの

確か2年前だったと思う。「成城で集合住宅を建てたい。設計コンペにしたいので、審査員をお願いできないか」と突然依頼された。それまで戸建て住宅を幾つか扱ってきたコスモ環境開発という若いディベロッパーだった。社長の奥野弘美さんは、「この計画は社運を賭けたビッグプロジェクト。だからこそ、コンペによって最良の建築をつくりたい」と、その意気込みを熱心に語った。

今、住宅に求められる役割は大きく変化している。しかし、住宅を供給する側は、その変化に追いついていない。相変わらず家族専用住宅をつくり続け

ている。例えば、東京区部における1世帯当たりの世帯人員は、2010年には2人を下回ると予想されている。また、夫婦と子どもによる標準世帯は既に全世帯数の3分の1に満たず、65歳を超える高齢者も、全人口に対し4分の1を超えるのは時間の問題である。このように、家族そのものが変化している。

従って、私が審査員を引き受けるとすれば、上記のようなライフスタイルの変化に即した「従来の家族専用住宅の集合ではないものを目指したいが、それでよいか」と申し上げた。「東雲キャナルコート」での試みを説明し、多くの都市居住者たちが望む住宅と、供給する側の画一化された住宅が全く乖

やまもと・りけん—建築家・横浜国立大学大学院 教授／1945年生まれ。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。1973年、山本理顕設計工場設立。主な作品：埼玉県立大学（1999）、広島市西消防署（2000）、公立はこだて未来大学（2000）、建外SOHO（2004）、東雲キャナルコートCODAN（2004）、横須賀美術館（2006）など。

離してしまっていること、住宅に求められている役割が、供給する側の考える“家族専用住宅”の役割を超え、はるかに多様化していること、などをお話した。また、今、特に「民間ディベロッパーがどのような考えを持って住宅を供給するのか」が問われており、「それを視野に入れることによって、従来の“住宅”というマーケットを大きく広げることになるはずだ。今までの住宅という範疇を超えた、新しい商品開発を考えてほしい」とお願いし、審査員を引き受けた。奥野さんからは「自分たちは、大手ディベロッパーにはまねのできない、新しい商品開発に社運を賭けて取り組みたい」という返事が返ってきた。

コンペに求めたもの

コンペの応募要項には、「住宅相互にかかわり合いがあると考えべきか、全く無関係であると考えべきか」、また、「住宅がさまざまな用途に使われる可能性があるとするれば、どのような用途を想定できるか」、更に、「新たなマーケットに対してどのような提案が可能か」などをうたった。

成城に建つ集合住宅であれば、単なる家族専用住宅ではなく、オフィスなどさまざまな用途に対応した住宅が求められるのではないかと。また、14～18世帯の住宅となれば、隣の住宅との間隔はそう広くは取れないはずである。つまり、今までの集合住宅のように閉じきってしまうのではなく、環境と一体となるような提案が望ましいだろうと考えていた。

コンペの結果

応募数103点の中から5案に絞り、ヒアリング審査をした結果、妹島和世さんの提案が最優秀案に選ばれた。その最大の理由は、入選した5チームの提案の中で住宅相互の関係が最も明快だと感じられたからである。つまり、新しい生活像のようなものを、最も鮮明にイメージすることができる提案だった。単純なキューブの組み合わせにもかかわらず、極めて多様な住戸をつくり出しており、特に1階部分の開放性は、さまざまな用途が生まれ出される可能性を感じた。そして、そのことが成城の街をより活性化させていくことに期待した。また、コスモ環境開発にとっても、この提案を積極的に推進することによって、新たなマーケットをつくる絶好のチャンスになるだろうと思われた。

新しい生活像への期待

過日、完成した「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」を見学した。1階は壁が少なく透明感があり、さまざまな用途に使われそうだと感じた。旗竿敷地の特性をうまく活かしている。特に正面のキューブは、オフィスやお茶を飲む場所やケーキ店などになってほしいと思った。

また、コンペでは、1階は土足で外から直接つながる仕上げとして考えられており、新しい住まい方が想像されたが、1階床はフローリングに変えられていた。ディベロッパー側が心配した結果だと聞いた。中に入ると、外から見るよりも随分と広く、変化に富んでいて面白い。斜めに居室がつながっているために、面積に比べて広々と感じた。また地下の環境も、光が多く入り、非常に心地良い空間になっていた。

そして、外装の少しピンクがかったレンガタイルは、今までの妹島さんの

スタイルとは違うが、優しく、柔らかな雰囲気、成城の街にとっても馴染んでいた。

新しいマーケットのモデルとなり得るか

コンペ案から実施に移る過程で、事業者と建築家の意見の違いもたくさんあったと思う。完成されたものは恐らく、供給する側と妹島さんの考える新しい生活像の具体化を、お互いが苦勞してすり合わせていった結果だろう。一般的に、供給する側の意識が保守的であれば、想定する住み手も形骸化したものになって、「今まで売れたから」という理由だけで同じものをつくらうとする。「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」においても“さまざまな用途”の可能性を提案したつくりは、“家族専用住宅”から見れば大変な冒険だったと思う。

しかし、「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」には、「こういうふうに住んでください」というメッセージがある。新しい提案の住宅をうまく利用する人、使いこなせる人、新しい住まい方をする人などを、売り手が選んでいく。これも一つの良い解答だったと思う。このプロジェクトが新たなマーケットのモデルとなることを期待している。

最後に、事業者はよく健闘したと思う。奥野さんのような方がいなかったら、このような住宅は実現しなかった。建築家を信頼し、新しい商品開発に賭ける決意は、大変な勇気だと思う。

新発想の「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」は、成城の街に新しい風を吹き込み、この街に貢献するような新しい環境をつくっていきと思う。*



アプローチから見た夕景

新しいライフスタイルを提案した タウンハウス

妹島和世
KAZUYO SEJIMA

成城に分譲マンションのコンペ

成城の街は世田谷区にある市内でも有数の高級住宅地である。緑地率や隣棟間隔を十分確保し、街並みのある密度以上にならないようにする…など、さまざまなルールを定めた「成城憲章」なるものをつくって、環境を大切に守っている街である。敷地は、その街の商業エリアから少し離れた閑静な住宅地に位置する第一種低層住居専用地域。道路から25mのアプローチを取った、いわゆる旗竿敷地である。ここに「多様なライフスタイルを提案する分譲マンションをつくる」という画期的なコンセプトのコンペが企画された。

これに共感し、集合住宅であっても「周りとの関係がもてるような環境」、そして「部屋の中にながらにして土に触れるような生活」、この2つをテーマに、集住体はどうあるべきかを提案した。もっとリラックスした生活ができるような集合住宅が販売されてもよいのではないかと考えていた。

小規模集住体はどうあるべきか

このタウンハウスは、分譲を目的とした14住戸から成り立っている。私たちはそれを20の小さな棟に分割し、位相を少しずつずらして配置した。大きな塊が立ちだかのような構成は避け、周囲の住宅と似たようなスケールにして、戸建て住宅が柔らかく連なる小さな棟の連続体として提案した。

各住戸は、幾つかの棟をまたいで有機的につながっており、どこまで1住戸なのか、外部からは分かりにくい構成になっている。平面的にも断面的にも、3つ、ないし4つの単位が数珠つなぎに構成される住戸は、よくある短冊形の構成ではない。玄関を入ると奥の庭が見える。2階に上がれば、位相がずれているため隣の棟になり、全く違っ

た景色が展開する。いろいろな生活の場面に、それぞれ違った場所や風景がもたらされる。また、各部屋は必ず2方が開放され、光や風を自由に取ることができる。窓が大きく開いているため、プライバシーを心配する声もあるかもしれないが、それは窓と窓が、真正面に向き合わないように、下がるか離すか、あるいは、距離を取るとか、高さをずらすなどの配慮をし、更にカーテンなどでも対応できるような方法で解決した。最初から全部隔絶したつくりは、後になって開きようがない。

内外を取り込み、穏やかに開く暮らし方

小さな棟をずらしながら配置することによって、すべての住戸が地上庭かルーフトラスを持っている。それは囲まれた庭であったり、開放的な庭であったりするが、それぞれは独立しているながら曖昧につながっている。室内と一体的に使って庭で食事をしたり、ガーデニングを楽しんだり、そこではさまざまな使い方が期待できる。つまり、私たちは住まい方として“外に近い暮らし方”が極めて大切であり、快適ではないかと考えている。セキュリティからいえば、扉1枚で堅固に管理できる方が良いという考え方もあるが、それはエスカレートして“絶対に人は入れない”ということまでいきかねない。もっとおおらかで緩やかに開いている暮らし方ができると考えている。お互いに開かれた暮らし方をしていれば、不審な人が入ってくればすぐに分かる。土に触れる生活こそ、今後は大事にすべきなのではないだろうか。

一般的に、建築計画を立てる時は、建ぺい率いっばいに建物を建て、その周りに空地を残すことが多いが、ここではそれを注意深く少しずつ分け、棟と棟の間に外部空間を入れ込んで、

せじま・かずよ—建築家・慶応義塾大学 教授・プリンストン大学 客員教授/1981年、日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務。1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。主な近作：ディオール表参道* (2004)、梅林の家 (2004)、金沢21世紀美術館* (2004)、鬼石多目的ホール (2005)、トレド美術館ガラスパビリオン* (2006)、ツオルフェライン・スクール* (2006)、ノバルティスキャンパス WSJ-158* (2006)、有元歯科医院 (2006)、海の駅おしま* (2006) など。(※印は西沢立衛との共同設計)

外部スペースを住宅内部に取り込むことを意図した。そうすることによって、外から見ても中から見ても生きた空間になるからである。そして、1階に面した部屋はできるだけオープンにした。例えば、ワークスペースやアトリエにする家が出てくるのも面白いと思っている。分譲住宅ではあるが、使い方次第で、もっと楽しく暮らせる可能性が広がっている。そういう住まいにしたかった。そんなことから地下室のある住戸もつくった。地下といても十分に明るく、夏涼しく冬暖かい快適な空間が生まれ、このタウンハウスの大きな特長になっている。

「梅林の家」の経験

私たちは、以前に設計した「梅林の家」で、貴重な経験をした。30坪弱の狭い土地でありながら、建物が小さくなくても「何としても梅林を残したい。自分たちも梅の花を楽しんでいるし、近隣の方たちも楽しみにしている」と施主の方は強く希望された。建物の周りの梅の木をぐるっと残した場合、とても建ぺい率いっばいには建てられない。それでもよいと言われた。それまでは20~30坪の敷地であればなおさら、建ぺい率いっばいに建てるのが当然と考えていたため、その意見に愕然としたものである。

しかし、考えてみれば、確かにどんな小さな家であっても、外に対して何らかの影響を持っている。また、周りの人との関係も生まれてくる。そこには“新たに建てる人の責任”のようなものがあって然るべきである。戸建て住宅であっても、一人ひとりが少しずつでも周りのことを考えれば、それぞれが違った形をしていても、連なって良い環境が生まれてくる。成城という街の豊かさ、そういうところから

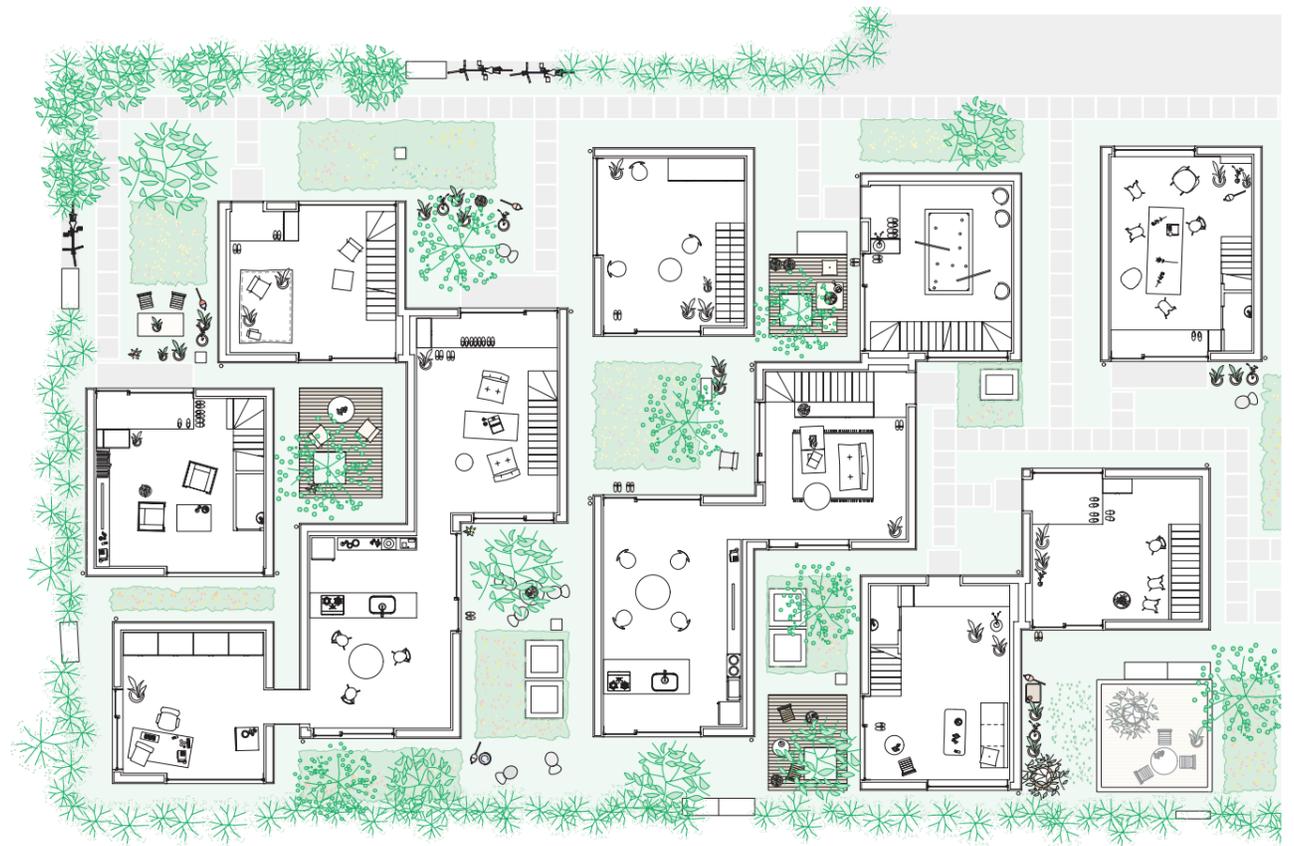
生まれているような気がした。

やがて街に…

近年、集合住宅も投資の対象ではなく「自分が本当に気持ち良く住みたい」という理由で購入されるようになってきた。「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」も、ここで暮らすことが楽しい、暮らしを楽しみたい、ここが好きだという人たちが住み、共用部分を自分の庭と同じように大事に思い育ててくれれば、全体の雰囲気はやがて「街」となっていくだろう。みんながちょっとずつ暮らしに参加するようなライフスタイルによって、住む人がどんどん快適な場所をつくっていく。そこに期待を持っている。*



上—ピンクのレンガタイルとアプローチ
下—1階平面イメージ (部分)



新しいライフスタイルとコミュニティ

高橋光政
MITSUMASA TAKAHASHI

たかはし・みつまさ—アベックスウィル 代表取締役／1950年生まれ。1975年、大蔵屋入社。不動産開発事業、流通事業を担当。1989年、老舗出版社グループの不動産開発会社立ち上げに参画し、取締役就任。住宅開発事業、等価交換方式による共同開発事業等を担当する。1992年、アベックスウィルを設立、代表取締役就任。現在に至る。

「特集3」 デザインする街 6

成城という街は初夏の季節が一番合うかもしれません。明るく、とても開放感のあるモダンな駅ビルに生まれ変わった「成城コルティ」から、成城通りを桜並木に向かうと、成城石井、老舗のブティック、宝飾店、銀行、ハーブの香りと装飾品や器に凝ったコーヒーショップ。この街の裕福で教養水準（寛容度）の高い暮らし向きを象徴するようにレトロとモダンな店舗が仲良く低層の軒を連ねています。盛夏に向かう前の透き通るような緑と風の中に佇む光景は、この街に住む人々が長い時間をかけて築き上げてきたものを、最も美しく表現しているかもしれません。

「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」は、成城通りから西へ、国分寺崖線沿いを通る富士見橋通りの手前に位置します。いまだ、旧来の成城らしさが残るこの地域にも、レトロとモダンが混在しながら新しい成城ライフを求める街並みが形成されつつあります。

「成城憲章」という街づくりの手引きに、「塀をつくらない」という項目があります。今日の安全に対する社会状況をかんがみますと事実上困難な面がありますが、その志の高さは受け継ぐべき伝統なのかもしれません。城壁のような塀を巡らし、セキュリティに囲まれる生活（その人の置かれている立場によっては必要悪なのかもしれません）がもたらす安全よりも、「良質で寛容度の高い成熟したコミュニティ」を形成することの方が、どれほど防犯や精神的な平安をもたらす上で効果が高いでしょうか。

「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」は、他者を排除するだけのゲートコミュニティではありません。建物の構造やレイアウトは、絶妙な間合いを取りながら外に向けて大きく開放さ

GARDEN COURT SEJO UNITED CUBES

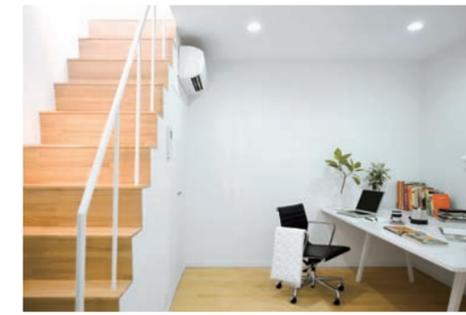


上—洗面室
下—浴室



れています。このことは、本来、建築が地域の文化や風土を醸成する風景としての役割を担うと同時に、住む人々のコミュニティへの参画を促す意志の表れであると思います。

来訪者を迎え入れる土間をほうふつとさせる大きなガラス張りの玄関ルーム。扉のない部屋と独創的なプランニング。外部に向けて開放的な一枚ガラスの先にある他者への間合いと寛容。「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」を生活者の視点から見ると、プライバ



上—地下・フリールーム
下—ダイニング・キッチン

■建築概要

所在地：東京都世田谷区成城5-25-19
設計・監理：妹島和世建築設計事務所＋大成建設一級建築士事務所
施工：大成建設東京支店
敷地面積：1,397.09㎡
建築面積：418.37㎡
延床面積：1,467.25㎡
規模：地下1階、地上3階
構造：RC造

シーの概念や家族の在り方、時に、コミュニケーションの本質まで見つめ直す必要に駆られます。

成城の光と風を受けて、「やわらかな透明感」に包まれる「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」。妹島和世さんの才能がもたらす仕掛けが、ここに住む人々の価値観や生き方と絡み合いながら、これから、どんな新しいライフスタイルとコミュ

ニティを形成していくのであろうか、とても楽しみです。

「意志のあるものだけが、美しい」。この建築とそこに住む人々が、この街が現在まで大事に育んできた文化や風土的なものを受け継ぎつつ、新たな「成城のライフスタイル」を発信する時、「ガーデンコート成城 UNITED CUBES」がこれからの集合住宅の在り方を指し示す道標として、名実ともに評価されるのかもしれません。✿

成城らしさの継承

横田重雄
SHIGEO YOKOTA

「特集3」 デザインする街 6

成城の街づくりは大正デモクラシーを背景とした「田園都市」をその理想像とし、大正14年（1925）に成城学園が現在の地に移転、学園建設の費用のために周辺の土地を開発分譲したことに始まる。その後、昭和2年（1927）に小田急線が開通、翌年には町名も砧村喜多見から学園の名前をとって成城となり、駅の南北120haに及び成城の街が誕生する。学園を核とした教育環境ゆえ、多くの文化人が集い、彼らは良好な住環境を維持しようと、敷地の周囲を板塀やレンガ塀ではなく、植栽や生け垣によって緑化する“申し合わせ”をつくっていた。このことが後になって実を結び、成城は田園調布と並ぶ高級住宅地といわれるようになった。

と、一とおりの知識を持って設計当初、橋上駅舎から駅前に降り立った私は思わず「ここが成城？」と首をかしげた。ひどく傷んだ駅舎とスーパー、狭隘道路に無数の電線、無秩序に並ぶ看板や街灯、道路脇に追いやられたおびたしい人の流れをかすめるようにバスとタクシーが走り抜けていく。

近代都市計画の理念によって、駅前広場や放射状道路など街全体の骨格が計画され、駅周辺が整然とした印象である田園調布に対し、住宅地に対して

GARDEN COURT SEJO UNITED CUBES

の簡単な“申し合わせ”しか持たなかった成城では、駅周辺の都市化を誘導する特別なルールは存在せず、他の駅前と同じ、およそ成城らしからぬ、“ゆとりのない空間”となっていた。

「成城コルティ」は小田急線が連続立体交差事業によって地下化されることとなった「成城学園前駅」の上部に計画された4階建て・36店舗からなる商業施設である。ホームの地下化に伴って、それまで分断されていた街をつなぐ幅20mの歩行者のための自由通路と、それに続く北口駅前広場の小田急電鉄による整備が、世田谷区の地区計画によって決められていた。このことにより、駅周辺の環境はかなり改善されるように思われた。しかし、ここに紋切型の「駅上の箱型商業ビル」を載せてしまうのではなく、かつて住民が宅地と街の接点に緑を置こうとしたように、個々の店舗と街との接点に何か“ゆとりを生み出す工夫”を凝らし、「街・駅・商業・自然」が融合した、心地良い都市建築の在り方を模索した。施設名称「CORTY=街の中庭」はそのようなコンセプトからきている。

昭和5年（1930）に朝日新聞社が主催した新時代の中小住宅設計コンクール「朝日住宅展」で実際に成城に建てられた16棟の和洋折衷様式は、その後、“成城スタイル”となっていた。駅ビル計画当初、地域住民からは、特徴的だったアールデコ調の丸窓やハーフトインバーの外観を引用したシンボル性が求められた。また当然のことながら事業主からは駅ビルとしての顔づくり、コマージュリズムをまとったシンボル性が求められた。しかし、記号としてのシンボル性を発する「硬くて存在感の強い建築」は、この街に“ゆとりを生み出す”ことにとってはマイナスであると考えた。それより、街に風穴を

よこた・しげお—建築家・坂倉建築研究所 執行役員／1962年生まれ。1986年、北海道大学大学院修了。同年、坂倉建築研究所入所、現在に至る。1999～2004年、北海道大学非常勤講師。2002年～、国土交通省国土交通大学校講師。
主な担当作品：北沢タウンホール（1990）、かずさアカデミアホール（1996）、東大和市民ホール（1999）、東京国立近代美術館（保存 増改築）（2001）、立教大学第1食堂（保存 増改築）（2002）、成城幼稚園新園舎（2005）など。

Show 商空間

成城コルティ

設計：坂倉建築研究所・小田急建設設計共同企業体

左—屋上庭園
右—自由通路（手前）とひな壇状に展開するプラザ吹抜け空間



展開するプラザ吹抜け空間やそれに続く屋上庭園である。こと最上階は、屋上庭園の緑の景観、都市を俯瞰する視線、高層ビル群や富士山など都市を眺望する視線を、同時に持つ都市のスペクタクルを満喫する場所である。

駅ビルが完成し、ここに立つ時、かつて住宅地に求められた“ゆとり”がここでも実現できたであろうと感じられた。そしてこの実現は、鉄道事業者である小田急電鉄の公共性への高い意識と、文化人といわれる地域住民の方々の新しいものへの強い探究心との、類希なる出会いによるものであったと深く感謝する次第である。*



左—最上階店舗通路
右—自由通路に続く北口駅前広場



Show 商空間



緑あふれる成城の住宅地